

英語圏三カ国における第二次世界大戦期の戦争人類学

— 民族誌的調査地域と戦時活動関連地域の比較 —

小坂 恵敬*

キーワード

英語圏の人類学、戦争人類学、民族誌的調査、人類学史

目次

- | | |
|---------------------|-----------|
| I はじめに | 2 英国 |
| II 人類学と戦争 | 3 オーストラリア |
| III 米英豪の人類学と第二次世界大戦 | IV 考察 |
| 1 米国 | V まとめ |

I はじめに

本稿は、第二次世界大戦期（1939～1945年）に連合国として協働した米国と英国、オーストラリアを対象に各国の戦争人類学（War Anthropology）を比較し、それぞれの特徴を明らかにすることを目的とする。本稿では、戦争人類学を戦争に応用された人類学とし、その定義は人類学と戦争の関係を検討したファン・ブレーメン（van Bremen 2003: 13-14）に従う。ファン・ブレーメンは他に類似の分野として、戦争人類学とその批判を含めて戦時下に行われたすべての人類学を「戦時人類学（wartime anthropology）」とし、戦争・戦闘行為そのものやその影響・結果に関する民族誌的調査・研究を「戦争・戦闘行為の人類学（the anthropology of war and warfare）」と区別している。

本稿で検討する米国と英国は第二次世界大戦までに、研究者を交流させながら英語圏の人類学的理論を発展させていた（e.g. Kuper 1973; Matei 2018）。一方、オーストラリアは、国内の先住民アボリジナルやトレ

ス諸島海峡民などに関する民族誌的情報を米英に提供して両国の人類学界に貢献した（大野 2009）¹。特に、英国はオーストラリアに研究者を供給しただけでなく、オーストラリア人に人類学の専門的訓練の場を与えた（e.g. Gray 2005, 2006, 2007）。ただ、三カ国の人類学界が連携していたものの、第二次世界大戦での人類学者の利用の仕方が国ごとに違っていた。

本稿が目指す点は、戦争に協力した人類学者の民族誌的調査地域（以下、調査地域）と戦時活動関連地域（戦時活動地域）の関係だ²。人類学者の存在意義は少なくとも第二次世界大戦まで、非西欧社会における長期の調査経験にあると理解されていたはずだが、第二次世界大戦期間中の戦争人類学では、人類学者の調査地域と戦時活動地域が一致しない例もある。これは軍や政府が、単なる現地情報の提供者以上の有用性を人類学者に認めていたことを意味する。人類学の戦争貢献は21世紀に入ってから積極的に検討されてきたが、統一した基準で比較したものは多くない（e.g. Price 2008; van Bremen 2003）。筆者は、調査地域と戦

* 南山大学

1 本稿では、オーストラリア先住民のうちトレス諸島海峡民以外の人々をアボリジナルとする。これまで使用されてきた「アボリジニイ（Aborigine）」の表記は、歴史的に差別的な意図を持って使用されてきたことが近年のオーストラリアで問題とされており、代わりに「アボリジナル（Aboriginal）」が彼らを尊重する表記として推奨されている。

2 以下では特に断りがない限り、民族誌的調査を「調査」と略す。

時活動地域との比較により、英語圏三カ国における第二次世界大戦期の戦争人類学の違いが明確になると考えている。

本稿では検討対象とする期間を、第二次世界大戦期に限定した。同大戦は現時点で史上最後の世界的な総力戦であり、英語圏三カ国などで戦争人類学が積極的に行われた。現在も米軍などが人類学者を活用しているが、その基礎は第二次世界大戦期に作られたといえる。応用人類学の一つとされる同期間の戦争人類学の検討は、現在の戦争人類学や応用人類学を理解する上での土台になりうる³。

以下では、第二次世界大戦期に焦点を当てる本稿の試みを位置付けるために、同期間の前後も踏まえた戦争に関する人類学的研究を概観する。続いて、米国と英国、オーストラリアの同期における戦争人類学を検討する。

II 人類学と戦争

人類学は、学問として成立した18～19世紀から戦争や戦闘行為への関心を持ってきた⁴。ただ、人類学者の戦争に対する姿勢は、第二次世界大戦までに両極に別れている。一方の極は、戦争人類学と距離を取るものだ。この極に含まれる人類学者の中には、部族間だけでなく国家間の戦争・戦闘行為を研究対象とする「戦争・戦闘行為の人類学」(van Bremen 2003: 13)に従事する者もあり、その一人としてマリノフスキー(Malinowski)が挙げられる⁵。彼は第二次世界大戦中の1941年に発表した「戦争の人類学的分析」(Malinowski 1941)の中で、「戦争の生得的起源の是非」や「戦争の原因」、「戦争の影響」といった論点を提示しながら、戦争の廃止や恒久的平和の可能性、その実現方法などについて議論した。

マリノフスキーが示した論点は、第二次世界大戦以降も引き継がれている。例えば米国では、1960年代に同国政府が戦争人類学に有用性を認めたことからベトナム戦争で人類学者を活用したが、それに反対する人類学者もいた。後者の人類学者は、戦争・戦闘行為の人類学に関する成果をまとめ、戦争の抑止の可能性を議論した(Fried, Harris & Murphy (eds.) 1968)。その後も、戦争人類学に否定的な立場の人類学者を中心に、戦争・戦闘行為の人類学の検討が続いている(Turner & Pitt (eds.) 1988; Haas 1990; Reyna & Downs (eds.) 1994)。

もう一つの極は、本稿が検討対象とする戦争人類学で、第一次世界大戦期にドイツや米国でその萌芽が認められる(Berner 2014; Price 2008: 32)。その後、戦争人類学は総力戦化が進展した第二次世界大戦で拡大し、米国や英国、オーストラリア、日本で人類学者の戦争への大々的な関与が認められている⁶。米国の場合、戦後に人類学者の戦争貢献が一時的に停滞したものの、先述の通りベトナム戦争で米軍が人類学の意義を見直して以来、人類学者の利用は今も続いている(McFate 2005; Price 2016; Rubinstein, Fosher & Fujimura (eds.) 2012)。

こうした動きに対し、本稿のように戦争人類学を振り返る動きもある。米国のように人類学の学会で倫理的な問題から戦争人類学が度々問題視されてきた一方、ファン・ブレーメンが指摘するように、人類学史の中で人類学者の戦争協力が本格的に取り上げられることは20世紀にはほとんどなかった(van Bremen 2003: 13)。しかし、21世紀に入ると、人類学的知見を戦争に利用することに対して批判的な視点を持つプライスが、第一次世界大戦から第二次世界大戦の期間と冷戦以後について米国の戦争人類学を検討している(Price 2008, 2016)。また、中生は広範に資料を集めて地域別、

³ 米国人類学界では、第二次世界大戦中の1941年に、人類学的知見の利用による社会的変革の推進を目指して「応用人類学会(Society for Applied Anthropology: SFAA)」が立ち上げられている。SFAAの学会誌「応用人類学(Applied Anthropology)」に投稿された論文の中には、戦時を反映し人類学的知見を戦争に応用した戦争人類学の事例が報告されている(Price 2016: 55–56, 58)。

⁴ 西欧の植民者や交易人、宣教師達は非西欧社会について記録を行う際、自らの活動の障害にもなりうる部族間戦争や暴力行為に焦点を当てた。植民地行政官や宣教師らにとって、植民化や布教によって達成した非西欧社会の「平和化」の成果を明確にするためにも、自らが所属する「文明」との差異を際立たせるものとして「未開」や「野蛮」な人々の戦争状態を記録することは重要だったからである。例えば筆者が調査地域とするパプアニューギニア・ニューブリテン島の場合、ドイツ行政官やメソジストの宣教師、ローマ・カトリックの宣教師らが、同島の北端にあるガゼル半島に住むトーライと呼ばれる人々に関して彼らの戦争について記録を残している。そうした記録を利用した19世紀の人類学者は、進化主義の観点から戦争の通文化・通時代的普遍性を指摘する一方で、文明こそが戦争を抑止して平和を実現できると主張していた(e.g. Maine 1888; Spencer 1882; Collier 1903)。

⁵ もちろん、戦争人類学に関与する人類学者が戦争・戦闘行為の人類学を行うことも可能である。

⁶ それぞれの代表的な成果を以下に挙げる。米国＝プライス(Price 2008); 英国＝クーパー(Kuper 1973); オーストラリア＝(Gray 2005, 2006); 日本＝中生(中生 2016)。

人類学者別に植民地の拡大から太平洋戦争に至るまでの日本人人類学者の戦争関与を整理・分析している(中生 2016)⁷。

このように、個々の戦争人類学の詳細な事例検討により、それぞれの人類学者の戦争関与が明らかにされて来た。しかし、統一した基準を設定して複数の国の人類学の戦争関与を比較する試みはほとんどない。この状況を踏まえて本稿が目指すのは、米英豪の英語圏三カ国に限定して戦争関与を俯瞰的に比較することである。

Ⅲ 米英豪の人類学と第二次世界大戦

以下では米国と英国、オーストラリアにおける戦争人類学の比較を行うが、先にその枠組みを示す。本稿は、それぞれの国の人類学者の活動を漏れなく検討することを意図していない。また例として取り上げる人類学者の戦争への貢献について、その詳細を議論することも目的としない⁸。筆者は、それぞれの国における人類学の戦争関与のあり方の「幅」をつかむことを目指しており、代表的な事例に焦点を当てることでその目的が果たせると考えている。

ただ、本稿では従来の研究にはない独自の分析枠組みとして、戦争に関与した人類学者の調査地域と戦時での前線や後方での戦時活動地域との関係に焦点を当てる。これにより、人類学者の戦争関与は以下に示すA～Dに分類できる。

A型：調査・前線一致型

民族誌的調査経験のある地域が前線となり、現地で工作・支援

B型：調査・後方一致型

民族誌的調査経験のある地域について、後方で情報提供・分析・助言・調査

C型：調査・前線不一致型

民族誌的調査の経験がない地域が前線となり、現地で工作・支援

D型：調査・後方不一致型

民族誌的調査経験がない地域について、後方で分析・助言・支援・調査

戦争関与の分類のうち、調査経験をそのまま生かすA型とB型は、政府や軍が情報不足の戦地について、その地域の住人の言語や慣習、気候や地理に精通する人類学者を利用するものである。ただしA型と後述するC型に従事する者には、学問上で獲得する知識・経験に加えて、調査の得手・不得手を決めるコミュニケーション能力、所与の状況の中で実際の目的を関係者以外に不要に知られることなく、与えられた工作任務を密かに実現するための計画策定・実行能力が必要とされた。つまり、適任者には研究者の資質とは違う能力も必要とされた。以下ではこの分類に従って、米国、英国、オーストラリアの順にそれぞれの国の戦争人類学を検討する⁹。

1 米国

米国政府は第二次世界大戦中、他の社会科学家と同様に人類学者を戦争に動員した。1943年時点で会員数約1,100人の米国人類学会では、人類学を職業とする者の5割が戦争に関与していたという(Eggan 1943)。第二次世界大戦の開戦当時、既に米国人類学者の調査地域は北米・南米を中心に、日本や東南アジア、オセアニア、中東、アフリカへと広がり、米軍が進出した戦地にも重なっていた。

米国人類学の戦争への協力は、人類学界の規模と調査地域の広がり背景に多岐にわたる。例えばA型の例として、アフリカでの情報活動と東南アジアにおける軍事作戦への人類学者の関与がある。モロッコなど北アフリカを調査地域とするクーン(Coon)と西アフリカのナイジェリアを調査地域とし同地で敵国の監視活動などを行ったハリス(Harris)は、米国の戦略情報機関(Office of Strategic Services: OSS)に所属し、それぞれ人類学者としての調査を理由にした情報収集活動や武器密輸などの工作活動を行った(Coon 1980; Yelvington 2011)¹⁰。東南アジアでは、人類学者のドゥヴルー(Devereux)が、心理戦の専門家として米海軍に大尉として所属し、同地域での調査経験を背景に仏領インドシナの山岳民を活用するゲリラ作戦を立案している(Spector 1982: 26–27)。

一方、B型は、自身の調査地域の地理・文化に関す

⁷ 日本については、他に清水らの試みもある(e.g. Shimizu & van Bremen 2003)。

⁸ 米国人類学の戦争関与を検討したプライス(Price 2008)は「人類学者」に考古学者を含めている場合もある。ただ、本稿の検討は人類学者に考古学者を含まない。

⁹ A～D型の分類はいずれも活動内容による細分化が可能だ。その作業は稿を改めて行うこととする。

¹⁰ 他にも30人以上の人類学者がOSSに協力した(Price 2008: 296)。

る情報を後方支援として要請に応じて提供するか、必要とされる形式にまとめて軍や政府機関と共有するものである。戦前に熊本県球磨郡須恵村（現在は同郡あさぎり町）の調査を実施したエンブリー（Embree）は、戦時転住局（War Relocation Authority）が米国内で日系米国人と日本人を対象に強制収容所を設けた際、収容者管理の円滑化を目指して行われたコミュニティ分析プログラムの構築に関わった（Pelzel 1952）¹¹。

B型には他に、調査で実際に得た経験・知識を基にした指導・訓練も含まれる。オセアニアを調査地域とした人類学者のエモリー（Emory）は、自身の調査経験を基に、陸軍と海軍の両方にオセアニア地域での生存術を兵士に指導した他、生存術をまとめた冊子を刊行している（Emory 1942）。他に、サモアやフィリピンの調査経験を持つキージング（Keesing）は、OSSの要請に応じて海軍高官にオセアニア事情の講義を行った¹²。

人類学者は調査経験を基に、接触したことのない文化や社会を深く理解する枠組みを持つことができるとの考えもある。C・D型に分類される人類学者の関与は、米国政府が人類学者にそうした職能を持つと認めた上でのものだ。例えば、調査地域とは違う前線を戦時活動地域としたC型には、北米先住民の研究者で国防省の情報部員として中東に赴任したスチュワート（Stewart）の例がある（Howell 1998）。さらに、上述のドゥヴルーが立案した作戦の実行部隊には、北米・南米の先住民を対象に調査経験を持つラバレ（La Barre）が作戦での参加兵に選ばれていた（Thompson 1998）。

米国におけるD型には、人類学者に調査経験がない地域・社会の特徴をまとめて整理させ、情報分析や政策への助言、活動を行わせた場合もある。例えば米国政府は、上述のエモリーが策定した収容所管理プログラムで、北米先住民を対象に調査したオプラー（Opler）

らの人類学者をコミュニティ・アナリストとして活用した（Opler 1945; Thompson 1998; Webster & Rushforth 2000）。また、クラックホーン（Kluckhohn）は、人類学を含む他の分野の社会学者らと、連合国軍がドイツや日本に実施した空爆に関しその影響を検討する「戦略爆撃調査（The Strategic Bombing Survey）」に参加している（Price 2008: 67）。

さらに、人類学者は他者理解の専門家として、敵である日本人とその社会の理解のために利用された。これは、大統領直属の戦時情報機関（The Office of War Information: OWI）による人類学の活用で、クラックホーンやベネディクト（Benedict）、リントン（Linton）らが参加した。彼らは日本での調査経験を持たず、また日本に関する専門的知識も欠いていた。これに対し、米国政府が人類学者に期待したのは、間接的であれ彼らが当時理論的に構築していた文化様式論、あるいは心理人類学の枠組みを使うことで、他者（日本人）を現地調査の経験なしに理解することだった（Price 2008: 69）。

D型では他に、自社会（米国社会）の調査経験がない人類学者が、戦時の国内社会の問題解決に向けた政策の策定や調査、助言を行った場合もある。この例として、北米先住民を調査したアーベル（Aberle）は、心理人類学を背景とした心理テストを実施して陸軍病院の運営に貢献した（Donald 2006）。

また、ミード（Mead）はD型の貢献として、米軍と英軍の協働作戦で起きる相互不理解の解消を目指した。彼女はその為に、1943年に英国で軍関係者へのインタビューなどのデータ収集とその分析を行っている（Price 2008: 69）。さらにミードは、戦争に対する米国人のモラルを形成する目的で、プロパガンダ活動に関する考えをまとめた冊子も公刊した（Price 2008: 50）。

このように、米国は人類学界の規模が大きかったこ

¹¹ エンブリーは他に、スミソニアンインスティテュートを通じて「戦争背景研究シリーズ」の一つとして日本社会や人々の生活に関する書籍を公刊するなど、日本についての情報を積極的に政府組織と共有した（Embree 1943）。スミソニアンインスティテュートは戦時、政府機関への民族誌の情報提供の依頼に対して積極的に応じていた（Price 2008: 140）。

¹² キージングはエモリーと同様に、オセアニア地域での現地生活の要点を説明した兵士向けのハンドブックをまとめている（Spindler 1961; Siegel and Spindler 1962）。

とから、人類学者の能力と経験を様々な分野で利用した¹³。人類学者の調査地域が多岐にわたっていたことで、人類学者の調査経験をそのまま応用した一方、特に研究者の層が厚い北米先住民研究者を、日本人・日系米国人強制収容所の管理に役立てるなど、調査経験の無い文化・社会を対象とした活用も見られた。

2 英国

英国人類学界は開戦以後、政府への協力に意欲的だった。例えば王立人類学協会は1939年に、政府の要望に迅速に応える目的で、提供可能な情報のデータベース化を目指して会員調査を実施している¹⁴。ただ、人類学者の大半は、戦地に行かず英国内に残っていたという (Kuper 1973: 150)。

実際の英国人類学者の戦時活用は、調査能力と共に特定地域・社会に関する具体的な経験・知識を重視するA型が目立つ。例えば、リーチ (Leach) は1942年から、調査地のビルマ (現在のミャンマー) で、対日ゲリラ戦部隊を必要とした英軍の命令により、陸軍大佐として北ビルマ招集軍 (NKL) の一団を組織して日本軍と戦った (Tambiah 2002: 43; Price 2008: 90, 92)。これは、英軍がリーチに対して、1939年からビルマへ調査に入ってカチン族などの社会や言語に精通したことなどを評価したものだった。また、同じ東南アジアのボルネオ島 (現マレーシア、インドネシア) ではA型の例として、英国人人類学者ハリソン (Harrison) が参加した現地工作活動「セムット作戦 (Operation Semut)」がある (Harrison 1984)¹⁵。セムット作戦は、連合軍がボルネオ北部のサラワク・サバ地域に上陸作戦を執行する前に、現地情報の収集と対日ゲリラ戦を目的としたものだった。ハリソンらは、ボルネオ島内陸部に落下傘で降下して現地民との接触を図り、彼らを組織して活動した (Helliwell 2003)。他に、

ナイジェリアなどを調査地としたナデル (Nadel) は同地で現地軍に入隊後、調査経験を生かす形で北アフリカに英軍が置いた軍政部門に配属され、A型の戦時関与を行っている (Morris 1968)¹⁶。

また、英国でも人類学の専門的知識を利用するB型もみられた。第二次世界大戦期までにザンビアで調査したアフリカニストのリチャーズ (Richards) は、1942～44年に植民地省に所属して、戦時下のアフリカを中心とした植民地行政への人類学の応用を図った (Firth 1985)。また、オセアニア地域で調査したファース (Firth) は、英国海軍向けに同地域の事情や地理を簡便にまとめたガイドブックを作成している (Price 2008: 87)。

一方、英国では、C型とD型の人類学者の例は米国ほど多くない。C型については、南スーダンのヌアー族を対象としたエヴァンズ=プリチャード (Evans-Pritchard) が挙げられる。彼は、兵士として第二次世界大戦に参加したが、後に調査経験のない中東地域の情報部門に移って活動することで軍に貢献した (Beidelman 1974; Barnes 1987)。D型の例にはアフリカニストのメイヤー (Mair) がいる。彼女は英国の外交シンクタンク「王立国際問題研究所」に所属後、1945年にオーストラリアに赴きパプア・ニューギニア地域の行政に関する顧問として赴任した (Middleton 1987)。

このように英国では米国と同様、特定社会の知識・経験の保有者として調査地域で工作・情報活動にあたるA型やB型が見られた。英国軍は人類学者を活用する際、現地語や現地社会の知識を重視しただけでなく、特にアフリカニストについては調査を通じて身に付けたコミュニケーション能力や異なった環境で計画を実行する能力を持つものとして評価していたといえる。これに対し、調査地域外を対象とするC型と後方で貢

13 複数の型で戦争に貢献した人類学者もいる。ベイトソン (Bateson) の戦争関与は、ニューギニアとインドネシアでの調査経験を基に、OSSと海軍向けにビジン英語の講義を行うB型から始まったが、後に未経験の文化・社会のデータを分析することで政府機関の要求に応じて助言を与えるD型として米国内の戦時モラルの分析に取り組んだ (Yans-McLaughlin 1988)。1944～45年にはD型の別の活動として、ビルマやタイ、中国、インド、英領セイロン (現スリランカ) をまたぎ、調査経験がない日本人を対象に対日本軍プロパガンダ工作の一環である謀略ラジオ放送の制作に従事している (Yans-McLaughlin 1988: 174, 202; Price 2008: 380)。さらにベイトソンは、日本軍から逃げた連合軍側のエージェンツ3人を救出するために最前線へ潜入する任務にも参加するなど、C型の戦争貢献を行っていたことがプライスによって確認されている (Price 2008: 380)。

14 英国王立人類学会 (Royal Anthropological Institute) は“CENSUS OF BRITISH ANTHROPOLOGISTS (A71).”を実施した。

15 セムット作戦は、英国がオーストラリアに設立した工作機関「オーストラリア特別オペレーション (Special Operations Australia: SOA)」が実施した。英国は連合国が設けた軍管区「南西太平洋地域」内にシンガポールやボルネオなどの植民地を持ち、戦後の権益維持を狙ってSOAを通じて同地域内で独自の存在感を示す必要があった。

16 英国におけるA型の関与としてはこの他、アフリカニストのフォーテス (Fortes) が、西アフリカで陸軍の情報部門に所属して活動した例もある (Drucker-Brown 1983)。

献するD型は、少なかった¹⁷。

3 オーストラリア

第二次世界大戦中のオーストラリア人類学界では、A型の戦争協力としてアボリジナルの調査を行ったトムソン (Thomson) とスタンナー (Stanner) の二人による同国北部防衛組織への貢献が挙げられる¹⁸。二人の関与の背景には、オーストラリア北部への日本人工作員の潜入や日本軍の上陸への懸念があった。

トムソンは、オーストラリア北部のアーネムランドを対象に北部準州特別偵察隊 (Northern Territory Special Reconnaissance Unit: NTSRU) を率いた¹⁹。NTSRU は、国内北部の防衛のためにアボリジナルを組織した偵察兼ゲリラ戦部隊で、同地域の調査経験を持つトムソン自身の提唱を受けて陸軍が設立したものである (Thomson 2003)。ただ、オーストラリア軍にとって最大の戦地であったニューギニアで連合軍の優勢が確立すると、日本軍によるオーストラリア北部への脅威がなくなり、NTSRU は1943年に解散した。

一方、北部準州の先住民を対象に調査経験を持つスタンナーの場合、開戦時に当時の陸軍相の秘書官を務めていた関係で立案した作戦が認められ、北部オーストラリア偵察部隊 (North Australia Observer Unit: NAOU、通称「ナッカルー」) の創設と少佐としての指揮を軍から命じられた (Walker & Walker 1986: 2-5, 7)。NAOU は騎馬で偵察を行う部隊で、アボリジナルを対象区域の地理事情に明るいガイドなどとして積極的に活用するなど、スタンナーの知見が生かされ

た²⁰。

オーストラリア政府はまた、第二次世界大戦前から実質的に植民地として管理してきたパプア・ニューギニア地域 (現在のパプアニューギニア) でも人類学者を戦争で利用した²¹。同地域でオーストラリア軍に所属して戦争に協力した人類学者の例では、A型として、パプア地域の調査経験を持つウィリアムズ (Williams) がいる。彼は戦時において、パプア地域だけでなくニューギニア地域でも、軍と現地民との間に入る連絡官として活動した (Elkin 1943; Griffiths 1977)²²。

ただウィリアムズの戦争協力は、B型から始まっている。彼は連絡官になる前、南西太平洋連合軍がオーストラリア・ブリスベンに設けた情報部門の一つ、「連合軍地理部局 (Allied Geographical Section)」で、パプア地域に関する地理的情報の提供や戦地で収集された各種情報の分析などを行った。

B型の活用は他に、陸軍のシンクタンクとして立ち上げられていた研究民事総局 (Directorate of Research and Civil Affairs: DORCA) を通じた現地調査などが挙げられる。これは日本軍が侵攻したパプア・ニューギニア地域を対象に、戦後の復興を見据えて戦闘がもたらした現地民への影響の理解が軍に必要なことが背景にある。この目的のために DORCA は、人類学者の Hogbin (Hogbin) にニューギニア地域などを調査させた²³。さらに、DORCA を通じて英国出身のウェッジウッド (Wedgewood) が、開戦前のパプア地域とニューギニア地域での調査経験を背景に、日本軍の脅威が去った現地民の教育や生活の向上に向けた現

17 ファースがニュージーランドを出身としている点を考慮するなら、彼の戦争貢献はニュージーランド人人類学者の戦争関与とも言える。ニュージーランド人では他に、オーストラリアでアボリジナルを対象に調査を行ったピディントン (Piddington) が、英国で陸軍心理部門の軍務に就いた後、オーストラリアで後述する陸軍のシンクタンクに勤務している。また、ニューギニアや中国での調査経験を持つフォーチュン (Fortune) は、英国でカナダ軍の軍役に就いていた。彼らを、英国やオーストラリアにおけるD型の例とすることもできる。ただ、ニュージーランド政府は、人類学者の戦争利用には消極的だった (Beaglehole 1944: 69-70)。

18 歴史学者のグレイ (Gray 2005, 2006, 2007; Gray, Munro & Winter 2012) は、オーストラリアにおける人類学の政治性に関心を持つ中で、オーストラリアの戦争人類学も検討した。グレイによれば、オーストラリア人類学者の太平洋戦争への関与について、その効果を測ることは困難だという (Gray 2005: 21)。

19 1941年から空軍大尉としてソロモン諸島やパプア地域などで軍務に就いていたトムソンは、自身のオーストラリア北部での調査経験を背景に同地域への日本人工作活動浸透の危険性を、メルボルンで陸軍士官を対象に講演する機会を得た。この講演に参加した陸軍高官とトムソンはその後、国内北部の防衛のためにアボリジナルを組織した偵察兼ゲリラ戦部隊創設の必要性で一致している (Hall 1997: 89)。

20 NAOU は、1943年に規模を縮小し、1945年に廃止された。

21 現在のパプアニューギニアの領土は、1883年に英領からオーストラリアへ割譲されたパプア地域と、第一次世界大戦後に国際連盟の委任統治領としてオーストラリアが管理したニューギニア地域の両地域から構成されている。本稿では、独立前の両地域を合わせてパプア・ニューギニア地域と表記し、独立後の国家と区別する。

22 ウィリアムズは、任務中の移動で搭乗機が墜落したことにより1943年に亡くなった。

23 ホグビンは開戦前、ニューギニア地域の他ソロモン諸島の調査経験を持っており、DORCAに入る前は日本軍と米軍が戦った現在のソロモン諸島ガダルカナル島で軍政府への現地民管理のアドバイザーとして活動した (Sligo 2013)。DORCAに所属後は、ホグビンは陸軍中佐として日本軍解放後のニューギニア各地で調査に従事している (Beckett 1986)。

状調査を行っている (Wetherell & Carr-Gregg 1990)²⁴。

他に、パプア・ニューギニア地域に関するB型の貢献を行った人類学者として、同地域で調査を行ったチネリー (Chinnery) がいる。チネリーは第二次世界大戦前に政府人類学者としてパプア・ニューギニア地域を調査した経験を持っており、開戦時にはニューギニア地域での現地民に関わる行政経験を応用する形で、オーストラリア・北部準州の先住民部門ディレクターとなっていた。しかし、南西太平洋連合軍傘下でオーストラリア軍が中心になって運営した戦地プロパガンダ機関、極東連絡局 (Far Eastern Liaison Office: FELO) の要請に応え、戦場プロパガンダの作成で必要とされたパプア・ニューギニア地域の地理や言語、現地民の文化慣習について情報提供などを行った (Gray 2005: 19)²⁵。

一方、オーストラリアの人類学界では、調査地域とは違う地域を対象に前線で活動するC型と後方で貢献するD型の例はほぼなかった。敢えていうならば、A型の例として挙げたトムソンとスタンナーが、その後それぞれC型とD型で関与したと言える。トムソンの場合、前線活動から外れて後、出向先の陸軍で蘭領インドネシアにおいてパトロール任務に従事し、負傷による後送後に病院で終戦を迎えている (Peterson 2003: 15-16)。スタンナーは、1943年までNAOUを通じたA型での戦争関与の後、DORCAのディレクター補佐として任官し、戦争関与をD型に変えている (Sligo 2013)²⁶。

IV 考察

米国にとって人類学者は、第二次世界大戦中の「有益な武器」(Price 2008: 65) だった。ローマ・カトリック教会の神父で、北米・南米先住民の民族誌家であったクーパー (Cooper) は、米国における第二次世界大戦中の人類学の軍事貢献における意義として、「西欧の学界 (occidental scholarship) にはほとんど知られていない地域の言語や生活慣習についての知識を軍や

関連機関の要望に応じて適宜情報を提供できた」点を挙げている (Cooper 1947: 11)。さらに彼は、対象地域について技術や社会、宗教、文化、価値体系について総合的な視点を持っていることを背景に人類学者が政策についても助言を与えることを可能にしたと説明している (Cooper 1947: 11)。いずれも、第二次世界大戦までの人類学が、対象とする社会の様々な要素を総合的に捉えて記述する民族誌的理解の枠組みを整えたことを背景としており、米国や英国、オーストラリアの三カ国で人類学が利用された理由を端的に説明するものである (表1)。

ただ、軍や行政府が人類学者に見出した利点は同じでも、第二次世界大戦期の人類学者の活用の仕方にも三カ国それぞれの特徴が表れた。米国は人類学者の数が多く、調査地域も世界各地に広がり、アフリカや太平洋、東南アジアにおいて人類学者をA型やB型で活用することが可能だった。

米国ではさらに、調査地域とは違う地域を対象に人類学者を前線・後方で活用するC型とD型も多く見られた。両型では特に、米国で層が厚かった北米を調査地域とする人類学者の活用が目立つ。米国は彼らを、中東に派遣して現地で情報活動に当たらせるC型や、米国内で日本人・日系米国人を対象とした強制収容所の統治管理に貢献するための日本人の集団分析といったD型で利用している。また、D型の例としては他に、米国当局がベネディクトやクラックホーンらを、彼らの調査地域・社会ではない日本・日本社会の分析・理解で利用した。

一方、英国やオーストラリアでは、多くの人類学者にとって調査地域がそのまま戦場、あるいは戦略的に重要な地域となった。英国は、ミャンマーにおけるリーチの例に加えて、アフリカニストの人類学者をアフリカ各地のそれぞれの調査地域を対象にA型で利用する場合が多かった。また、オーストラリアでは、オーストラリア北部や、パプア・ニューギニア地域などのメラネシアで、同地域の調査経験を持つ人類学者をA型あるいはB型で活用する例が目立った。一方、調査地

24 この他、シドニー大学の学部で人類学を学んだリード (Read) は応召中に、同大学のスタッフだったホグビンの助言を受けてDORCAの調査に関わった (Gray 2006: 175-176)。リードは終戦までニューギニア・マルカムリバー地域に残って同地の調査活動を行い、戦後はニューギニアニストとして活動した (e.g. Read 1947)。

25 パプア・ニューギニア地域のB型の例では他に、現地で調査を行ったグローブス (Groves) がいる。彼は、陸軍教育総局の副ディレクターを務める中、連合軍兵士向けにニューギニア戦での現地民の対応方法を示した冊子『You and the Native』の作成に携わるなど英国で見たファースのような戦争貢献を行った。

26 他に、アボリジナルを調査したシドニー大学のエルキン (Elkin) は、国内向け戦意高揚プロパガンダへの人類学の活用を政府に積極的に喧伝していた。彼がその任に当たっていれば、D型の貢献になっただろう。

表1 米英豪の人類学者：民族誌的調査地域と戦時活動関連地域による分類

分類	米国	英国	オーストラリア
A型：調査・前線一致型 調査地域と前線活動地域が一致	クーン ハリス ドゥヴルー	リーチ ハリソン ナデル フォーテス	トムソン スタンナー ウィリアムズ
B型：調査・後方一致型 調査地域と後方活動対象地域が一致	エンブリー エモリー キージング ベイトソン	リチャーズ ファース	ウィリアムズ ホグビン ウェッジウッド チネリー グローブス
C型：調査・前線不一致型 調査地域と前線活動地域が不一致	スチュワート ラバレ ベイトソン	エヴァンズ＝プリチャード	トムソン
D型：調査・後方不一致型 調査地域と後方活動地域が不一致	オブラー クラックホーン ベネディクト リントン アーベル ミード ベイトソン	メイヤー	スタンナー

※人類学者の例は本文中で検討したもの。表は著者作成。

域とは違う地域を対象とするC型とD型は、英国とオーストラリアではあまり多くなかった。

C型とD型が米国で多くみられた一方で、英国やオーストラリアで少なかった点について、以下では要因と考えられるものを二点指摘しておく。まず、主流となった人類学的理論の成果の違いが米国と英国・オーストラリアの違いの背景にあるといえるだろう。例えば米国では、1930年代に多様な地域の民族誌的資料を研究者の関心に従って利用可能とする通文化比較の機運が出てきたことが、同国で特定の調査地域を超えたC・D型としての人類学者の活用につながったと考えられる（Price 2008: 77）。さらに、ベネディクトらが、対象とする社会のエートスを見出す「文化の様式」理論を生み出していたことも、非調査地域を対象に人類学者を活用する後押しとなった（Price 2008: 236）。ベネディクトらの文化の様式論は、元々調査を基にして理論を構築したが、必要な情報の種類の確定と分析手法を確立させたことで、調査経験が無くても入手できる情報を使って他者理解を可能にしたからである²⁷。戦時中の制限された状況の中で、利用可能な情報から敵国（日本）の理解が急務となった米国当局

にとっては十分魅力的だった。

これに対し、第二次世界大戦までの英国とその影響を大きく受けていたオーストラリアの両人類学界では、機能主義人類学が主流で、米国のように非調査地域について積極的に議論できるような理論的展開はなかった。さらに別の要因として、英国とオーストラリアのそれぞれの政府による第二次世界大戦以前からの人類学者の活用のあり方が挙げられる。両国政府は第二次世界大戦前、「政府人類学者」を採用して現地民の情報を収集して植民地経営に役立てようとしていた。これにより、両国政府の中に人類学者を割り当てた調査地域を超えて活用する考えが生まれ難かったといえるだろう。これらを背景として、英国とオーストラリアでは、人類学者の活用がA型とB型に集中し、C型とD型がほとんどみられなかった要因となった。

V まとめ

人類学の戦争関与について、本稿は連合軍三カ国の人類学者の関与の特徴を、調査地域と戦時活動地域の関係に焦点を当てて比較した。米国は人類学者の層の

²⁷ 実際、戦後にはミードらが手法を精緻化し、冷戦下のソビエト連邦や中国などの社会と文化を現地調査なしで入手可能な情報により分析する手法を編み出した。彼女らは、分析マニュアルとして『遠隔での文化研究（The Study of Culture at a Distance）』を公刊している（Mead & Metraux 1953）。

厚さと人類学理論の展開を背景に、地理的に最も幅広い関与が見られた。

これに対し英国とオーストラリアは、人類学の利用の仕方でも米国の幅の広さを超えるものではなかった。ただ、英国は人類学者の調査地域の知見をそのまま活用して前線で利用する例が目立ち、オーストラリアでも英国のように前線で人類学を活用する例も見られた。一方、英国とオーストラリアは、共に人類学者に固有の調査地域を重視したが、米国のように調査地域にこだわらず他の地域や分野に応用することはほとんどなかった。

こうした人類学者の応用における調査地域への固執性の違いについては、動員できる人類学者の数から説明することも可能である。千人規模で人類学者を利用できた米国は、調査地にこだわらずに人類学者の能力と経験を活用することも可能だった。一方、百人あるいは数十人規模の人類学者しか存在しない英国やオーストラリアには、そうした人的資源の余裕はなかった。さらに、米国は通文化比較や文化様式論を展開した一方で、英国とその影響下にあったオーストラリアの理論的到達点が機能主義人類学であった点も、人類学者の戦争利用で調査地域についての考えの違いを生み出したといえる。英国もオーストラリアも、戦前から人類学を海外植民地や国内先住民の管理に応用する方法が政府側に定着しており、その点も調査地域を超えて人類学を積極的に応用する姿勢を持ち得なかった要因となった。

最後に本稿に至る経緯と今後の展望を示したい。本稿は、第二次世界大戦中にオーストラリアが行ったプロパガンダへの関心から展開したものである。筆者は、パプア・ニューギニア地域の現地民に対するプロパガンダにオーストラリアの人類学者が関与した事実を知り、その関与を同国の戦争人類学の中で位置付けることから始めた。続いて同じ英語圏で連合軍を構成した米国と英国の戦争人類学とも比較・検討し、三カ国の戦争人類学の違いを確認した。そうした違いの一端を明確に示す目的で採用したのが、調査地域と戦時活動地域の一致と不一致を基準とした戦争人類学的行為の四類型だった。

本稿では紙数の都合により、この四類型の細分化やその意味するところの検討は行わなかったが、今後の課題としたい。筆者は本稿で示した四類型のあり方に、それぞれの国における人類学的知の位置付けが示されていると考えている。今後の展開として、この四類型

を再検討した上で、オランダなど他の連合国や日本における戦争人類学を比較し、本稿の内容と突き合わせれば、第二次世界大戦期までの各国における人類学的知の在り様が浮彫となり、現在の人類学を考える一助になると考えている。

謝辞

本稿は、2023年11月に南山大学人類学研究所が主催した第2回公開講演会で筆者が発表した「仮面が空から降ってきた……—太平洋戦争時のプロパガンダ機関 FELO に対するオーストラリア人類学の協力」から派生したものである。本稿につながる講演の機会を下さった人類学研究所の渡部森哉先生、講演に向けてご支援下さった宮脇千絵先生ら人類学研究所のスタッフには、あらためてここに謝意を伝えたい。桜美林大学の中生勝美先生からは講演当日、コメンテーターとして筆者の検討を既存の研究の中に位置づけるなど有益な指摘を頂いた。また、参加者からの講演中・後のフィードバックは、本稿を執筆する上で大いに参考となっており、併わせてお礼申し上げたい。査読者の批評は、本稿の価値をより明解に示す上で有益なコメントだった。査読者の方へも、ここに心からの謝意を表す。

参考文献

(日本語文献)

大野 あきこ

- 2009 「「マルチカルチュラル」オーストラリアにおける人類学」『国立民族学博物館研究報告』33(3): 359-339。

中生 勝美

- 2016 『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』風響社。

(英語文献)

Barnes, J. A.

- 1988 Edward Evan Evans-Pritchard 1902-1973, *Proceedings of the British Academy* 73, 1987: 447-490.

Beaglehole, Ernest

- 1944 The South Seas Regional Commission, *The Journal of the Polynesian Society* 53(2): 59-71.

Beckett, Jeremy

- 1986 Ian Hogbin, *American Ethnologist* 13(4): 799-801.

Beidelman, T. O.

- 1974 Sir Edward Evan Evans-Pritchard (1902-1973). An Appreciation, *Anthropos* 69(3/4): 553-567.

Berner, Margit

- 2010 Large-scale anthropological surveys in Austria-Hungary, 1871-1981. In *Doing Anthropology in Wartime and War Zones: World war I and the cultural sciences in Europe*. R. Johler, C. Marchetti and M. Scheer (eds.), pp. 233-253. Bielefeld: transcript Verlag.

- Collier, James
1903 The Struggle for Existence in Sociology, *Knowledge* 26: 138–140.
- Coon, Carleton S.
1980 *A North Africa story: The Anthropologist as OSS Agent, 1941–1943*. Ipswich, Mass.: Gambit.
- Cooper, John M.
1947 Anthropology in the United States during 1939–1945, *Journal de la Société des Américanistes* 36: 1–14.
- Donald, Leland
2006 David Friend Aberle (1918–2004), *American Anthropologist* 108(1): 263–266.
- Drucker-Brown, Susan
1983 Obituary [Mayer Fortes], *Royal Anthropological Institution News* 56(15): 15.
- Eggan, Fred
1943 The American Anthropological Association, *The A.A.A.S. Bulletin* 2(5): 38.
- Elkin, A. Peter
1943 F. E. Williams—Government Anthropologist, Papua (1922–43), *Oceania* 14(2): 91–103.
- Embree, John F.
1943 *The Japanese*. City of Washington: Smithsonian Institution.
- Emory, Kenneth
1942 *Castaway's Baedeker to the South Seas*. Honolulu: Army Printing Plant.
- Firth, Raymond
1985 Audrey Richards 1899–1984, *Man* 20(2): 341–344.
- Fried, Morton, Harris, Marvin and Murphy, Robert (eds.)
2012 *Scholars at War: Australasian Social Scientists War*. Canberra: ANU Press.
- Gray, Geoffrey
2005 Australian Anthropologists and World War II, *Anthropology Today* 21(3): 18–21.
2006 The Army Requires Anthropologists: Australian Anthropologists at War, 1939–1946, *Australian Historical Studies* 37(127): 156–180.
2007 *A Cautious Silence: The Politics of Australian Anthropology*. Canberra: Aboriginal Studies Press.
- Gray, Geoffrey, Doug Munro and Christine Winter
2012 Introduction. In *Scholars at War: Australasian Social Scientists, 1939–1945*. Geoffrey Gray, Doug Munro and Christine Winter (eds.), pp. 1–27. Canberra: ANU Press.
- Griffiths, Diedre J. F.
1977 *The Career of F. E. Williams, Government Anthropologist of Papua, 1922–1943*. Thesis (MA). The Australian National University.
- Haas, Jonathan (ed.)
1990 *The Anthropology of War*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, Robert A.
1997 *The Black Diggers Aborigines and Torres Strait Islanders in the Second World War*. Canberra: Aboriginal Studies Press.
- Harrison, Tom
1984 *World within: A Borneo Story*. London: Oxford University Press.
- Helliwell, Christine
2022 *Semut: The Untold Story of a Secret Australian Operation in WWII Borneo*. Southbank: Penguin.
- Howell, Carol L.
1998 *Cannibalism is an Acquired Taste, and Other Notes: From Conversations with Anthropologist Omer C. Stewart*. Niwot: University Press of Colorado.
- Kuper, Adam
1973 *Anthropologists and Anthropology: The British School, 1922–1972*. London: Allan Lane.
- Maine, Henry S.
1887 *International law a Series of Lectures Delivered before the University of Cambridge*. London: J. Murray.
- Malinowski, Bronislaw
1941 An Anthropological Analysis of War, *American Journal of Sociology* 46(4): 521–550.
- Mcfate, Montgomery
2005 Anthropology and Counterinsurgency: The Strange Story of Their Curious Relationship, *Military Review* 85(2): 24–38.
- Mead, Margaret and Rhoda Metraux
1953 *The Study of Culture at a Distance*. Chicago: University of Chicago Press.
- Middleton, John
1987 Lucy Philip Mair, 1901–86—Obituary, *Africa* 57(1): 99–101.
- Morris, Freilich
1968 S. F. Nadel. In *International Encyclopedia of the Social Sciences* (Vol. 11). David L. Sills and Robert King Merton (eds.), pp. 1–3. New York: The Macmillan Company & The Free Press.
- Opler, Marvin K.
1945 A “Sumo” Tournament at Tule Lake Center, *American Anthropologist* 47(1): 134–139.
- Pelzel, John
1952 John Fee Embree, 1908–1950, *The Far Eastern Quarterly* 11(2): 219–225.
- Peterson, Nicolas
2003 A Biographical Sketch of Donald Thomson. In *Donald Thomson in Arnhem Land (compiled and introduced by Nicolas Peterson)*. Thomson, Donald F., pp. 1–21. Carlton, Vic.: Miegunyah Press.

- Price, David H.
2008 *Anthropological Intelligence: The Deployment and Neglect of American Anthropology in the Second World War*. Durham: Duke University Press.
- 2016 *Cold War Anthropology: The CIA, the Pentagon, and the Growth of Dual Use Anthropology*. Durham: Duke University Press.
- Read, Kenneth E.
1947 Effects of the Pacific War in the Markham Valley, New Guinea, *Oceania* 18(2): 95–116.
- Reyna, S. P. and R. E. Downs (eds.)
1994 *Studying War: Anthropological Perspectives*. Langhorne: Gordon and Breach.
- Rubinstein, R. A., K. B. Fosher and C. K. Fujimura (eds.)
2012 *Practicing Military Anthropology: Beyond Expectations and Traditional Boundaries*. Sterling: Kumarian Press.
- Shimizu, Akitoshi and Jan van Bremen
2003 Introduction, *Senri Ethnological Studies* 65: 1–11.
- Siegel, Bernard J. and George D. Spindler
1962 Felix Maxwell Keesing, 1902–1961, *American Anthropologist* 64(2): 351–355.
- Sligo, Graeme
2013 *The Backroom Boys : Alfred Conlon and Army's Directorate of Research and Civil Affairs, 1942–46*. Newport, N.S.W.: Big Sky Publishing.
- Spector, Ronald
1982 Allied Intelligence and Indochina, 1943–1945, *Pacific Historical Review* 51(1): 23–50.
- Spencer, Herbert
1882 *The Principles of Sociology*. London: Williams and Norgate.
- Spindler, George D.
1961 Felix Maxwell Keesing, 1902–1961, *The Journal of the Polynesian Society* 70(4): 391–392.
- Tambiah, Stanley J.
2002 Edmund Leach: An Anthropological Life. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thompson, Anna Z.
1998 *Guide to the Raoul Weston La Barre Papers, 1934–1970*. Suitland, MD: Smithsonian National Museum of Natural History.
- Thomson, Donald F.
2003 *Donald Thomson in Arnhem Land (compiled and introduced by Nicolas Peterson)*, Carlton, Vic.: Miegunyah Press.
- Turner, Paul R. and David Pitt (eds.)
1988 *The Anthropology of War & Peace: Perspectives on the Nuclear Age*. South Hadley: Bergin & Garvey.
- van Bremen, Jan
2003 Wartime Anthropology: A Global Perspective, *Senri Ethnological Studies* 65: 13–48.
- Walker, Richard and Helen Walker
1986 *Curtin's Cowboys: Australia's Secret Bush Commandos*. Sydney: Allen & Unwin.
- Webster, Anthony K. and Scott Rushforth
2000 Morris Edward Opler (1907–1996), *American Anthropologist* 102(2): 328–329.
- Wetherell, David F. and Charlotte Carr-Gregg
1990 *Camilla: C. H. Wedgwood 1901–1955, a life*. Kensington, N.S.W.: New South Wales University Press.
- Yans-McLaughlin, Virginia
1986 Science, Democracy and Ethics: Mobilizing Culture and Personality for World War II. In *Malinowski, Rivers, Benedict and Others: Essays on Culture and Personality*. George W. Stocking (ed.), pp. 184–217. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Yelvington, Kevin A.
2011 Jack Sargent Harris (1912–2008), *American Anthropologist* 113(3): 537–540.